

い
っ
ぽ
ん
の
キ
第二卷

北村
想

第五話・金槌

男 1

男 2

女

2
5

第六話・帰郷

男

老人

2
13

第七話・最後の授業或いは告別

教師

生徒 1

生徒 2

生徒 3

生徒 4

2
17

第八話・木のある惑星

カミヤ船長

カント技術部長

グリーン医師

カネタ地学天文学博士

ヤカタ生物学者

保安部員 1

保安部員 2

2
31

ナレーター

コンピューター

第九話・国境

男 2

女 1

女 2

女 3

娘

第五話・金槌

「いっぽんの木があつた」という男1の声。明るくなって・・・
一本の木がある。その木から少し離れたところに古びたベンチ。
男が二人座っている。

男1「たとえば、あそこに女の死体が転がっているだろ。

そんなものはない。

男1「あれは僕がやったことだといつても、君は信じやしないだろ。

男2「おまえ、何年浪人してる？

男1「四年。

男2「いい加減に見切りをつけたほうがいいんじゃないか。

男1「そんなことは出来ないよ。

男2「今年も駄目だったんだろ。

男1「だって、今年は志望校を絞りすぎたから・・・

男2「・・・いつからなんだ？

男1「何が？

男2「女の死体だよ。

男1「女の死体はどうしたって？

男2「だから、そういうものが見え始めたのは、いつからなんだ。

男1「だって、あそこに女の死体があるだろ。

男2「医者には行つたのか。

男1「医者？何の話をしてるんだ。

男2「それはこつちのセリフだよ。女の死体なんて何処にあるんだ。

男1「あそこに。

男2「おれ、もう行くよ。おまえの与太につきあつてるほど暇じゃないんだ。

男1「待つて。ここに金槌があるだろ。

男2「そんなもの何処から持つてきたんだ。

男1「金物屋で買ったんだ。

男2「その金槌がどうしたつて？

男1「これでやったんだ。これであの女の後頭部をガツンと。

男2「やっぱ、俺、帰るわ。家業をついだもんだから、米の配達なんかあるしよ。うち、いま借金で大変なんだよ。

男1「もう少し聞いてくれ。

男2「ともかく、医者へ行ったほうがいいぞ。

男1「ある日、僕は金物屋で金槌を見つけたんだ。何の変哲もない金物屋だ。何をしに行つたのか、もう忘れたけど、その日からその金槌が気になって仕方がなかったんだ。なにか、金槌が僕に訴えているようで。ともかく僕はその金槌を買った。買えば理由がはつきりするかと思つたからだ。買って、その金槌を手にした時、理由がはつきりした。

男2「何だつたんだ？

男1「殴りたかつたんだ。

男2「ぶつそうなこういうなよ。

男1「と、いうより、もうやつてしまったんだ。

男2「女をか。

男1「ここによく来るんだ。

男2「女がが。

男1「そう。どうしようもない女だ。

男2「赤の他人だろ。」

男1「本業は高利貸さ。貧乏人に金を貸しては高い利子をとっている。いったい何人の貧しい人が、あの女に泣かされたことか。それだけならまだしもだ。いいかい、あの女は僕の知っている友達のうち、三人と肉体関係があるんだ。二人の子供を墮している。それはまた別の男の子供なんだけど、友達から慰謝料をふんどくってるんだ。百万円だぞ。そんな大金あるわけないから、友達はローンで借りたんだ。うち、一人は返せなくて、暴力団に追われてる。」

男2「スゴミのある話だね。」

男1「とにかく、ゆるせない女だ。いつか天誅を下してやろうと思っていたんだ。」

男2「何もお前がやんなくったって。一文にもならないのに。」

男1「お金がどうのこうのじゃないんだ。僕はそういうエゴイストで墮落した女が大嫌いなんだ。虫酸が走るってやつだ。」

男2「女はこんなところに何しに来るんだ。」

男1「この木さ。」

男2「この木がどうしたって？」

男1「この木の根本に貯めた金を埋めてるんだ。」

男2「ほおーつ。なにか時代がかってるな。」

男1「もうずいぶんの金があ根本に埋まってると思うよ。」

男2「掘ってみたのか。」

男1「いや、まだだ。何度もうけど、お金のことはどうでもいいんだ。」

男2「それで、俺に何の相談だよ。」

男1「だから、僕が女をこの金槌で殴ったのは、義憤の上のことだということをわかって欲しいんだ。」

男2「そうか。まあ、どうでもいいや。(腕時計を見て) やっぱ、帰るわ。いや、お前のいったことは充分理解したから。せいぜい死体を発見されないようにしとくんだな。そうすりゃ、殺人罪は立証されないらしいからな。じゃあな。」

男1「あつ、それから。」

男2「(振り向いて) おう、それからやつばお前、医者行つたほうがいいぞ。(去った)」

黙つて金槌を見ている男1.

女がやつてきた。

女「あの、

男1「え？

女「そこ、空いてます？(とベンチを指す)」

男1「ええ。どうぞ。」

女「(軽く会釈してベンチの片隅に腰を下ろすと、鞆から文庫を取り出して読み始めた)」

突然、蟬が騒ぐ。

男1「うるさい蟬だな。(と、独り言)」

女「(男の方をちらつとうかがつたが、また本に視線をもどして)」

男1「たとえば、近い未来が視えてしまったらどうします。」

女「(誰に問い掛けたのか、わからない様子だが、男をみると) あの・・・」

男1「ですから、僕、最近、近い未来が視えるようになったんです。」

女「あの。ひよつとして、私になにか話しかけてらっしゃるの？」

男1「ええ。他に誰がいるんですか。」

女「ええ。でも私、あなたとお会いするの初めてですから。

男Ⅰ「僕はもう何度も会ってるんです。

女「え？

男Ⅰ「未来が透視できるようになっちゃったんです。それで、あなたが将来何をするか、

僕にはみんなわかるんです。

女「(気味悪くなったのだろう、本をたたんだ)

男Ⅰ「僕自身があなたに何をするかも、知ってるんです。

女「(立ち上がろうとする)

男Ⅰ「まあ、座ってなさいよ。(こっちの方が立ち上がった)

女「あの、私、

男Ⅰ「将来の悪い芽は、出る前に摘んでおいたほうがいいともいえます。(ベンチの後ろに回った)でも、こうなるのが、未来の姿なんだから、仕方ないということも出来ません。何れにせよ、こうなるんですから。

女「あなた、何の話をしてらっしゃるの？

男Ⅰ「あそこに赤い屋根の家が見えるでしょう。

女「えっ？何処？

男Ⅰ「あそこ。坂道を真っ直ぐあがった辺り。

女「(首をひねる)

男Ⅰ「あそこをよおく、見てください。

女「見るが、そんな家はないので、振り返ろう」

とした刹那、

男Ⅰ「(金槌を女の後頭部に振り下ろした)

女「ギヤアッ。(逃げようとする)

のを、追うようにしてまた一撃。

男1「天誅！」

女は前にのめって倒れた。

男1「こうなることはわかっていたんです。でも、これで多くの貧しい人や、僕の友達があなたの犠牲にならなくて済んだんです。それが唯一の救いです。(両腕を脇に構えると軽い駆け足で去って行く)

(しばらくして、男2が戻ってきた。ベンチに帽子を忘れたのだ。その帽子を手にする前に当然ながら、倒れている女を見つけた) あっ、あっ……(歩み寄って、女をゆすると) もしもし、しっかりして下さい。どうされました？もし……(女にもう息がないのがわかる) じょ、冗談じゃないぞ。(慌てて去ろうとするが、ふと、木が目に入る。女と木を交互に見ると) まさか、まさかな。そんな馬鹿なことないと思うけどさ。……ひょってしてつてこともあるよな。

男2「(木の根本を掘り始めた)

と、もどつてくる男1。男2はそれに気がつかない。

男2「俺ん家も借金で苦しいんだよ。まさかとは思うけどダメモトつてことで、出てくりや

メツケもんだからな。

男1「(男2の後ろにまわる)

男2「(なにか掘り出した) あつ、ほんとにあつた。

と、刹那、男1は男2の後頭部に金槌を振り下ろした。前のめりに倒れる男2。

男1「馬鹿だな。(男2の握っている包みを取って)金がどうこういつてるんじゃないんだ。でも、出てきたものは、貰っておこう。いつておくけど、僕は友情を軽んじるヤツも大嫌いなんだ。(また駆け足で去っていく)

溶暗

第六話・帰郷

一本の木がある。

——「いっぽんの木があった」という男の声。

その声の主と思われる男、旅行鞆を手に登場。

（男の心のつぶやき）古い屋敷の前庭に、栗の木が立っていた。と、いう記憶がある。不思議なことにそれ以上の記憶が鮮明ではない。屋敷というのは私の家にたぶん間違いはない。そこに住んでいた覚えもぼんやりとではあるが、ある。いっぽんの木、古い屋敷。私の故郷の記憶。もう二十五年以上前の話だ。

男は木を見ている。ときおり触ってみる。

男「この木だ。間違いない。

と、野良仕事の帰りらしい老人が通りかかる。

老人「（男に会釈して）まだまだ、日が長ございますな。そのうち、つるべおとしに
におてんとさまが、山の向こうに沈んでしまうようになるんでしょうな。1年なんぞ、
あつというまです。

男「あの、

老人「はい？

男「この辺りに大きな家はたっていないませんでしたか？

老人「大きな家？

男「ええ、ずいぶんと大きな家です。ちょうどこの栗の木がその家の広い前庭に立って
たんです。

老人「この辺りにですかな。

男「そうです。

老人「わしは、もう八十年、この村に住んでおりますが、栗の木のある大きな家という
と、

さて・・・

男「思い出せませんか。

老人「いや、わしも毫碌してきておりましてな・・・ああ、そうか、そうか、思い出
しました。

ここに家がありました。大宮さんのところの家がありました。九段畑の大宮さんとい
えば村の者は誰でも知っております大きな家でした。

男「やっぱりあつたんですね。

老人「はい。ございました。

男「その家はどうなつたんですか？

老人「たしか・・・おお、そうです。焼けてしまいました。

男「焼けた？

老人「はい。もうずいぶんと昔の話ですが、二十年ばかり前、台所から火が出ましてな、すつ
かり焼けてしまいました。村一番の火事でした。

男「家人は、家の者はどうなつたんですか？

老人「ご隠居さん夫婦、主夫婦、息子さん、娘さん、住み込みの使用人、みいんな、かわ
いそうに焼け死んでしまわれました。酷いことでございました。誰も助かった者はお
らんかったようでございます。

男「火事があつたのか。（木を見て）この木だけ焼け残つたというわけか。

老人「あなたは、大宮さんのゆかりの方でらっしゃいますか？

男「ええ。・・・大宮幸次郎を憶えていますか？

老人「大宮幸次郎。・・・ああ、幸次郎坊っちゃまですか。あの方も可哀そうなことでしたなあ。確かな七つの時でしたか、この栗の木に登られて、枝が折れて、すぐ医者を呼んだようですが、亡くなられました。

男「この木から落ちた？」

老人「はい。たいそうな葬式だったですな。初めてのお子でしたから、若奥様の悲しみは一入だったようでございます。あなたは幸次郎坊っちゃまのお友達かなにかですか。

男「いえ。・・・」

ずいぶんと長い沈黙があつて。

男「・・・あのふもとのバス停で次のバスを待つとすると、どれくらい待たねばなりませんか？」

老人「あいにく、わしはバスに乗りませんので。

男「そうですか。

老人「一時間に一本ばかりでしょうか。どこまで、お行きなさるんで？」

男「いや、もう帰ろうかと思ひまして。

老人「そうですか。せつかくいらつしゃつたのに。ここはじめてでございますか？」

男「二十五年ばかり前に。・・・」

老人「そうですか、二十五年ぶり、そうですか。どこからお越しで？」

男「東京です。

老人「そりゃ、遠いところから。

男「あの、

老人「はい。

男「大宮幸次郎のことなのですが。

老人「はい。」

男「どういう男の子でした？」

老人「そりゃあもう、利口な、活発で元気のよい、大きくなったらきつと偉い人になっていたに違いありません。世の中というのは皮肉なものですね。ままならんものです。わしのように何の取り柄もない爺が、この年まで長生きして、恥ずかしいこつてす。

男「その子はこの木から落ちて、死んだのですね。」

老人「はい、そうです。」

男「そうですか。・・・いや、お手間をとらせました。」

老人「いいえ。何でしたら、わしの家はこの先ですので、お茶でも飲んでいつてくだされ。」

わし一人の気楽暮らしですから、遠慮はいりません。

男「はい。ありがとうございます。」

老人「（お辞儀すると去った）」

男「（木を見ていたが）いっぼんの栗の木。大きな屋敷。二十五年の歲月。私の故郷。そうか。ここでは俺はもう死んだか。」

男、ゆつくりとその場を立ち去る。

溶暗。

第七話・最後の授業或いは告別

「いつぼんの木があつた」という生徒たちの声。明るくなる。

一本の木がある。幹に黒板がかかっている。

少し離れて、おそらくその木の枝からだろう、ハンギング・ロープ（首吊り用の縄）が垂れている。

生徒1（女性）が来る。

木を眺めるようにして、その廻りをまわる。ただし、ロープについては、関心を示さない。

生徒2（男性）が来る。生徒1をしばし観ているが。

生徒2 「君、したことある？

生徒1 「（気のない返事）えっ？

生徒2 「君、もうした？

生徒1 「（適当な返事）いえ、まだ。

生徒2 「そう。

生徒1 「（深呼吸、あるいは大きな溜め息）

生徒2 「（見つめたまま）俺もないんだけど。したいと思う？

生徒1 「あれ？何の話。

生徒2 「だから、俺とき。

生徒1 「え？何聞かれてるのかしら、私。

生徒2 「いや、俺と、したいと思うかって、それ。

生徒1 「？・分らないけど、あなた、ひよつとして、あれ。

生徒2 「あれって？

生徒1 「したいって、それ、私と寝たいと思ってるの？

生徒2 「何だと思ったの。」

生徒1 「(笑う) なんだ。(ややあつて) 馬鹿みたい。

生徒2 「何が、馬鹿みたいって？俺のこと？

生徒1 「違う、違う。私のこと。私、違うこと思ってたから。

生徒2 「どう？

生徒1 「どうって？

生徒2 「寝ないよね。

生徒1 「馬鹿みたい。・・・これは、あなたに対していったのよ。

生徒2 「あつそ。

生徒1 「他にも、いっぱいいるでしょ。他、あたれば。

生徒2 「だって、時間がないから。

生徒1 「時間がないから、私で間に合わせるってこと？

生徒2 「違うちがう、そうじゃない。それは誤解だ。

生徒1 「どっちにしても同じ。(また深呼吸のような溜め息)

生徒2 「じゃあ、君、もう一度聞くけど、してないの？

生徒1 「(空を透かすように見る) そんなこと、答える必要ないでしょ。

生徒2 「気になるじゃない。

生徒1 「気にしてどうすんのよ。

生徒2 「どうもしないけど。(空を見る)

生徒1 「どうもしないこと、気にして、どうすんの。

生徒2 「いや、ただ、

生徒1 「(視線をもどす) 話す必要なし。閑話打ち切り。

生徒2 「そうか。僕の真心を、

生徒1「何、いつてんのさ、真心だなんて。ヤリタイ心が真心ならば、世界は真心でいっぱいよ。」

生徒2「なんか、身も蓋もないな。」

生徒1「いいえ、蓋をしたの、クサイ話に。」

生徒2「クサイ?・・・でもね、世間一般の男というやつは、自分の好む女性に対しては、ほぼ八割の確率で、ヤリタイって思ってるんだぜ。」

生徒1「そんなクサイ統計、聞いたことないわ。」

生徒2「さらに、自らに死がせまった時とか、生きる望みが薄くなった時、あるいは、人の諸々に興味を失った時、性欲は急激に強くなるんだ。」

生徒1「それいったい誰の統計学？」

生徒2「いや、これは遺伝子学。」

生徒1「はーん。遺伝子が存亡をかけて、男をエッチにするのか。」

生徒2「そう。だから、これは、僕の人格とは関係ないの。」

生徒1「さつきは真心って、いったじゃない。」

生徒2「そう。しかしながら、僕はそれを真心に昇華しているわけ。」

生徒1「そういうの、御都合主義っていうのよ。」

生徒2「真心だつて、都合があるさ。」

生徒1「そういうのを、詭弁というの。あつ、また、地面がゆれた。」

生徒2「え、気づかなかつたけど。」

生徒1「そういうのを鈍感というの。」

生徒2「敏感すぎるんじゃないの？」

生徒1「さつきの話の後で、あなたに〔敏感〕なんてコトバを使われると、猥褻な感じがするわ。」

生徒2「考えすぎだよ。」

生徒1「確かに、私は、敏感。でも、何に敏感になっているのか、よく分からないことが多いの。何かに、ハッと気がついたり、え、これ変って思ったり、何か大事なことにフッと気づくんだけど、それが何なのか、分からないってことが多すぎるの。きつと、頭悪いからだろうと思うけど。だから、ヒトから、あなたたつてボンヤリしてるわねつて、いわれる。でも、私はけしてそうじゃないの。ハッと気づくことに対処のしようがないから、ただ、虚ろになってしまっただけなの。

生徒2「うーん、それは、僕にもあるよ。僕の場合は、ちゃんと、理屈でものごとを考えて、理屈どおりに動いているつもりなんだけど、それが、ヒトから見ると、奇矯なふるまいに映るらしいんだな。僕の頭のなかでは、スジは通ってるんだけど、そのスジが、ヒトには見えないんだな。

生徒1「見えるわけじゃないわよ、あなたの頭の中のスジなんて。

生徒2「いや、だから、さっきの、その、あの話もだよ、僕の頭の中ではスジが通ってるんだけど。

生徒1「今度は自己弁護にまわってる。

生徒2「当然じゃないか、自己が自己を弁護するのは。これは、自己防衛機構だよ。

生徒1「自衛隊にでも、行ったら？」

生徒2「ほら、また、そうやって僕のことを茶化すんだから。

生徒1「自分のいったことが、とても、いいアイデアだと思えて」そうよ、男はみんな自衛隊行くといいのよ。この日本をアメリカとロシアと韓国と北朝鮮と中国とユダヤの陰謀から守るために。

生徒2「何だいそりや、まわり、敵だらけじゃないか。

生徒1「そうよ。まわりは敵ばかり。知らなかった？」

生徒2「ロシアと北朝鮮は分かるとして、アメリカや、

生徒1「そういうのを平和ボケっていうのよ。

生徒2 「平和ボケ？」

生徒1 「アメリカの失敗って知ってる？」

生徒2 「何、それ。」

生徒1 「日本民族を殲滅しなかったことよ。」

生徒2 「物騒な意見だな。」

生徒1 「太平洋戦争の終わる頃、アメリカは全部で16個の原爆を保有していたのよ。」

生徒2 「そのうち二つを広島と長崎におとしたってわけか。」

生徒1 「変だと思わない？」

生徒2 「変て？」

生徒1 「原爆なんて使わなくつても、日本が戦争に負けることくらい、アメリカには分かっていたのよ。」

生徒2 「それは、君、本土上陸によるアメリカ兵の犠牲を最小限度に食い止めるために、確か、そうアメリカはいつてるじゃないか。」

生徒1 「平和ボケよ、それ。それなら、何で16個も原爆がいるのよ。」

生徒2 「君こそ、反核の運動でも始めたのか。」

生徒1 「何、いつてるの。アメリカは16個の原爆を、いいえ、もつと多くの原爆を使って、日本をきれいさっぱり灰にするつもりだったのよ。」

生徒2 「そりゃ、君、

生徒1 「アメリカは、日本がおそらく徹底抗戦するだろうって、そう思ってたのよ。ところが、案外簡単に降伏しちゃったから、計画はオジャンになったの。」

生徒2 「そんな、馬鹿みたいな話。」

生徒1 「あなたが、信じるかどうか、そんなこと、どうでもいいわ。」

生徒3 (女性) が来る。

ハンギング・ロープのところで立ち止まる。
それを見ている。

生徒4（女性）が来る。

生徒4 「（生徒1と2に）どしたの、あんたたち。

生徒2 「どしたとは、どうして？」

生徒4 「喧嘩でもしたのかなと思ってさ。

生徒1 「どして？」

生徒4 「変な雰囲気だから。

生徒1・2 「べつに、変じゃない。

生徒4 「（軽く笑う）ほほ、変だわ。

生徒2 「僕たちは、日本の将来について、議論してただけだ。

生徒4 「あらそう。ほほ。

生徒2 「（生徒4に）君はどうして、そうシニカルなんだ。

生徒4 「え、誰に対して？」

生徒2 「誰にというわけではないけど、いまは僕というか、僕たち二人に対してだよ。

生徒4 「あなた、どうして、そう気張るの？」

生徒2 「気張ってなんかない。

生徒4 「（空の彼方を透かすように見る）ずいぶん大きくなったみたい。

生徒2 「誤魔化すんじゃないよ。

生徒4 「冷静と冷笑をごっちゃにしてるだけよ、あなたは。

生徒2 「レイショウって？」

生徒4 「冷たい笑いのことに決まってるじゃん。

生徒2 「君は、冷静でシニカルではないと、いいたいわけだな。

生徒4 「何で、あんた、そんなに気張るのかしらね。

生徒2 「いや、君こそシニカルだ。

生徒4 「人を乾燥剤みたいにするの、よしてよ。

生徒2 「乾燥剤？ ああ、シリカゲルのことか。

生徒4 「まあ、私は、ちょっと見は乾燥してるかも知れないけどね。涙なんか乾いてしまつて、二度と出てこないほうが、どれだけ、楽に生きられるか。I hope so っってこね。

私は、自分を大切にしたいとだけしか思っていないわ。できるだけ、私がいつも私であると感じられるように、そう考えてるだけよ。

生徒2 「哲学だね、それが君の。されど、夢叶わずつてとこなんだろう。

生徒4 「なんで、そんなに気張るの、あんた。

生徒2 「何か反論を試みようとするが」

生徒3 「先生、いらつしやったわ。

教師（男性）らしい、初老の男、小脇に書物を抱えてやつてくる。

生徒たちは、黒板の前のほうに座る。

教師「（空を透かして見て）ああ、だいぶん……（生徒たちに視線を移し）いや、みな

さん、お早う。待たせましたね。早速、授業を始めましょう。ああ、それから、予めいつておかねばならないことが、あります。みなさん、もうご存知かと思いますが、今日で私の授業は終わりです。今日の授業が私とみなさんの最後の授業になります。

さて、もうひとつ、これは最後の授業ですので、述べておきますが、というよりも告白してしましますが、私が、この野外授業で、みなさんに教えたことは、みんな嘘です。

えー、では、今日の、というか、最後の授業の課題に移ります。

課題は『数のかぞえ方』です。

ここに（と、ポケットから蜜柑とバナナを取り出す）みかんとバナナがあります。私はみかんは好きですが、バナナは、ちよつと苦手です。どつちもいまは果物屋さんにたくさんあります。比較的安いものです。

さて、世界中のみかんの数とバナナの数とは、どつちが多いか、というテーマでみかんとバナナのかぞえる場合、それが出来ると仮定して、ここにこうして出したように、みかん一個についてバナナ一本を、対応させてかぞえていけば、どちが多いか分かるわけです。これを、一対一対応といいます。数の多さを比較する場合のかぞえ方です。

この一対一対応は、まったく違うことをするのに使えます。たとえば、この町の地図を作る場合です。

地図ですから、図面にこの町の道路や家を描きこまねばなりませんが、出鱈目に描いては地図になりません。そこで、この一対一対応を使うのです。

例えば、この木を中心に、私たちのいる様子を紙に描くと同じです。まず、この木の位置の印をつけて、それから、次はこの丘をそのまわりに、その中に私たちを、座っている通りに対応させて、紙に写していけば、いいのです。（そのような図を黒板に描く）地図も同じようにして、描いていきます。Aさんの家の隣はQさんの家、Eという建物の傍にはRという道路。対応させながら、写していけばいいのです。

これを写像といいます。像を写すという意味です。同じように、一対一対応を使って、自然数と偶数としては、どつちが多いか、調べることも出来ます。

生徒1「そんなの、調べなくても分かるんじゃないですか。

教師「あなたには、分かりますか？

生徒1「だって、自然数というのは、1・2・3・4・5つていう数字でしょ。
教師「そうです。

生徒1「で、偶数は、 $2 \cdot 4 \cdot 6 \cdot 8$ って数字でしょ。

教師「そうです。

生徒1「じゃあ、偶数というのは、自然数の中に含まれるんですよね。

教師「ええ、そのとおり。

生徒1「じゃあ、自然数の半分が偶数で、後半分は奇数なんじゃないんですか。

教師「するとあなたは、自然数というのは、偶数の丁度、倍だけあると、思うんですね。

生徒1「はい。

生徒2「僕も、そう思います。いえ、これは彼女に同調しているというわけじゃありません。僕は真理の観点から、そう思うんです。

生徒4「なんで、気張るんだろ、こいつは。

教師「じゃあ、かぞえてみましょう。

生徒1「かぞえるつていつても、数つて、キリないじゃないですか。

教師「はい、そうなんです。無限にあります。ここで、自然数の全体の集合をNとします。それから、偶数全体の集合をEとします。これを一対一対応で数えます。

次のように黒板にかく。

N	0,	1,	2,	3,	4,	...	n
E	0,	2,	4,	6,	8,	...	2n
	—	—	—	—	—	—	—

教師「どちらも、無限にあるわけですから、NとEはすべて一対一対応します。ですから、数は同じです。

NとEとかく。

教師「おかしいことだと思うかも知れませんが、理屈の上ではそうです。みかんとバナナの数をかぞえたのと同じ方法です。

生徒1「信じられない。

教師「はい。しかし、これはカントールという人が考えた、集合論と呼ばれている数学の一大概念なのです。カントールは、無限を数えてみようと思ったのです。

生徒4「バカじゃないかしら。

教師「まあ、晩年は悲惨でした。

生徒1「どうなったんですか。

教師「狂って死にました。

生徒4「あつたりまえだわ。

生徒2「いや、数学とは、そういうものだ。

生徒1「え、どういうもののなの？

生徒2「それくらい、スゴイものだと、思う。

生徒4「何、気張ってんの、あんた。

教師「ところで、今日の課題は、実はこのかぞえ方、つまり一対一対応の考え方を使って、あるモノを対応させてみようというのが、ほんとの本題なのです。（黒板を消す）私たちは、今日、ここで、ココロとコトバとカラダをかぞえてみたいと思います。

黒板にココロ、コトバ、カラダとかく。

教師「これに一対一対応をつけたいです。

と、生徒3が立ち上がる。

生徒3「あの、私。

教師「え、どうしました。

生徒3「そろそろ。

教師「え、あなた、ひよつとして、

生徒3「はい。そろそろ、いきます。

教師「あなたの番なんですか。

生徒3「はい。

教師「どうしても、いかねばなりませんか。

生徒3「はい。

教師「あなたの意志次第なんですよ。

生徒3「はい、でも、いきます。

生徒3、一礼すると、ハンギング・ロープのところへ歩いていく。

教師「誰か、止めてあげようと思う人はいないんですか。

生徒4「手伝うんだったら、出来るけど。(立つ)

教師「手伝う。

生徒4「いつてみれば、介しやくです。(いく)

生徒3、首吊りを始める。生徒4がそれを手伝ってやる。

教師「こんなことが、あつてはいけない。先生は、そう思うんですが。

生徒1「じゃあ、先生が止めればいいじゃないですか。

教師「そう思うのです。ですから、その授業をこれからやろうとしていたのです。

生徒1「間に合わなかったんですね。

生徒2「そういうもんだよな。

教師「そういうもんだとは、どういうことです。

生徒2「いえ、何でもないです。ただ、

教師「ただ？

生徒2「どうしてそれを、最初の授業にしなかったのかと、疑問に思うだけです。

教師「ですから、いまやろうと、

生徒1「最後の授業にですか。

教師「学問に、遅い早いはありません、志したときが、学ぶべきときなのです。

生徒4「ねえ、誰か手伝ってよ、ロープが上手く首に入らないのよ。それにこれ、ちよつ

と彼女の背丈とあつてないから、足を引っ張つてあげたほうがいいと思うの。

生徒2「どうするんだ。(生徒1に)

生徒1「なんで、私にそんなこと聞くの。あなた、いけば。

生徒2「いや、ここは、黙つて考えるところだ。沈思黙考だ。

生徒4「ねえ、彼女、苦しむわよ。ちゃんとしてあげないと。

教師「わかりました。私がいきます。

教師も手伝いに参上する。

教師「手伝いながら、生徒3に)なぜ、死ななければならないのです。

生徒3「遺書を書きましたから。

教師「いいですか、遺書はコトバです。あなたはコトバを残して、カラダを失ってしまう

のですよ。分かってますか。

生徒3「分かってません。」

生徒1「(突然、思い立ったかのように下着を脱いで、黒板に引つ掛け、横になる) さて、どうする？」

生徒2「君、それ、なんの真似だ。」

生徒1「別に、好きなように解釈すればいいわ。」

生徒2「(黒板のパンティを手にして) 難しい課題だが、簡単なことかも知れない。」

生徒1「ああ、空が大きい。そうして、あんなにも、大きくなった。私よ私、どうして私なの。あなたよあなた、どうしてあなたなの。コトバよコトバ、カラダよカラダ、ココロよココロ、どうして、何が、ああなのよ。うん、バラバラだ。一対一対応してないんだ。あつ、また地面がゆれた。」

生徒3の首吊りを懸命に手伝う、生徒4と教師。上手くないかない。

生徒1は寝ころんだままだ。

生徒2はパンティと何かを一対一対応させているのか、交互に数をかぞえている。やがて地鳴りとともに空が赤く輝いて・・・溶暗。

第八話・木のある惑星

声——「2096年、地球における最も優秀である科学者たちと、その家族を乗せた宇宙船ビートル号は、10年の歳月をかけた、太陽系外宇宙の探査飛行を目的に飛び立った。ビートル号は核融合を推進エネルギーに、光の速度のおよそ65%で、いまだかつて、人類が観たこともない、宇宙の深遠を航行したのである。

そうして、およそ1080日めのことである。ビートル号のセンサーは、ある惑星から発信されたと考えられる救援信号をキャッチした。

果たして、それは知的生命との初めての邂逅となるのだろうか。保安部員を含む、7人の乗組員と科学者は、救助信号の発信地と思われる、M型惑星に降り立った。

いっぽんの木のまわりに、現れる人々。

カミヤ（船長）「カネタ博士、ほんとにこの木だけなんですか。

地学天文学博士・カネタ「本船からの探査のとおりだとすると、この惑星には、この木だけが存在するだけだ。

生物学者・ヤカタ「信じられませんね、カミヤ船長。だって、この天体はすくなくともMクラスですよ。太陽系で比べるなら、火星とほぼ同じ大きさです。その惑星に、木がたったのいっぽんですか。

カミヤ「ヤカタ教授、君だって、探査報告は見たろ。

ヤカタ「半信半疑だね。

カミヤ「本船からの探査では、この天体すべてにおいて、有機物反応は、この木だけだったわけだな。

カント（技術部長）「そうです。あとは、ごらんのように、ただの土の平原です。

カネタ「ただの土か、さて、カント君（トリ・コーダーを近づけると土壌を分析）ただの土かな？

カント「（同様に周囲を調査）

ヤカタ「他には草いっぽんとてナシか。

カント「まったく奇妙な風景だなあ。山も川も海もない。あるのは空と土の広野と、

ああ、地下には水脈がありますね。

カミヤ「（カネタに）如何です、土は。

カネタ「地球の土の化学組成と変わらないな。と、いうより、この土は非常によく肥えた土だ。窒素、燐酸、カリ、石灰、硫酸、鉄、若干の珪素。微生物こそ存在しないが、養分、水分の状況やアルカリ度数もいい。あと、温度に通気、透水性、植物にとっては、育成の最適条件を満たしているといつていい。

カント「大気の成分も、申しぶんないですね。しかるに、存在するのは、この木がいっぱいだけ。どういうわけですかね。

カミヤ「これほどまでに、奇妙な風景というやつに出会ったことはないな。地平線の果ての果てまで、まるで更地のような平野だ。

カネタ「で、この木自体の組成は？

グリーン（医師）「（トリ・コーダーを見ながら）木ですね、いわゆる、ふつうの。地球にも存在する、植物です。種別は、針葉樹のようですが、まったくそうであるとは限りません。

カント「まるでサン・テグジュペリの『星の王子さま』ですね。ほら、ちいさな天体に花がいっぱい咲いてる、あれです。

カミヤ「カント君。救援信号の発信地点は、ここなんだな。

カント「ええ、この辺りです。感応誤差は半径30メートル以内です。

カミヤ「半径30メートル以内でも、以外でも、あるのはこの木だけか。

グリーン「不思議だわ。

カミヤ「不思議？ドクター・グリーン、何か、気になることでも発見しましたか？

グリーン「いいえ、何がっていう、具体的なことじゃないの。ただ、何だかしらないけど不思議なの。ああ、そう、医者の方の勘っていうやつかもね。

カント「グリーンさん、医者にも勘の方が、あるんですか。

グリーン「臨床医学がさかんだったのは、二十世紀の後半だけよ。けっきょく、重要なのは、医者としての勘だつてことに、医学はたどりついたのよ。

カント「なるほどね。

カネタ「ドクターの、その勘というやつに、私も同調するね。

カミヤ「どうしてです。

カネタ「この土壌は、出来過ぎている。とても、自然に生成されたものとはいえない。カント「じゃあ、誰かが、人工的に作ったとでも。

カネタ「そういう結論はまだ早いが、地質学的にいつて、このような混合率の成分を持った土壌が、偶然出来るとは、信じがたい。もつと信じがたいことに、これだけの肥沃な土壌がありながら、何故、これいっぽんしか植物がないのか・・・

カミヤ「（通信する）ビートル・コンピューター、センサー最大で、この木の周囲全般の状況を再度調査、報告せよ。

C——「再調査結果報告。前回探査結果に補足すべき報告はありません。

カミヤ「（通信する）救援信号は、まだ出ているか？

C——「現在、信号は感知できません。

ヤカタ「信号を発信した生命体が存在するとすれば、コンタクトしてきても、よさそうなものなのにな。生物の反応もまったくゼロだ。

カネタ「（思案に耽る）おかしいな。何か腑におちない。何だろう。

グリーン「（トリコーダで、再度、木を分析）カネタ博士、さっきたしか、微生物はいな

いとおっしゃいましたね。

カネタ「たしかに。ん？そうか、ああ、それだ、分かった。

グリーン「カネタ博士。あの、すいませんが、先に私の質問に。

カネタ「ああ、悪かった。そう、たしかに微生物の痕跡はなかったよ。ミズ・グリーン。

そこで、私がいま気づいたのは、では、この土壌を耕しているのは、何かということなんだ。植物が育つためには、土中の微生物の活動が大きな条件になる。常に土壌をリサイクルするのは土中の微生物の活動によるからな。

グリーン「それは、土中の有機成分を醗酵させて、肥料に変化させるってことですね。

カネタ「そう。で、それが？

グリーン「トリコーダーの分析フアクションを植物ではなく、機械に設定してみてください。

「機械？」てなことをいいつつ、みなさん、そうする。

ヤカタ「こりや、驚いたなあ。

カント「これは、木のかたちをした精密な機械ですね。この木は、植物じゃないってことです。

ヤカタ「いや、さつきの植物フアクションでの分析で植物だということが明らかに示されている。従って、植物であることも、間違いないと思う。

カント「じゃあ、この反応は？

カネタ「面白い。見たまえ、フアクションを無機物質体に切り換えても、それ相応の分析反応が出る。

ヤカタ「有機物フアクションを生命体に合わせても、対応するぞ。

カント「(木をみて) じゃあ、こりや、なんなんです。木ですか、それとも。

カミヤ「結論を早まるのは、よくないことは、承知のうえで、これは私の推論だが、この木は、我々が、そうであろうと予測して分析する、あらゆるものに応じて、組成を変化させていることになる。

カント「つまり、これは、

グリーン「ちよつと待つて。その前に私のさっきの意見のつづきを述べていいですか？

カント「どうぞ。

カネタ「微生物の話だったな。

グリーン「ええ。カネタ博士の分析によると、土中の成分には、微量の珪素が含まれていて、ということでしたね。

カネタ「たしかに。

グリーン「この木の組成をみると、珪素が基本になって組織のノード、つまり、結び目や集合の中心点を作っています。それが、ちょうど、人間の神経組織みたいな感じですよ。で、トリコーダーのファンクションをランダムに変化させると、珪素がそれに対応して、やつぱり、さまざまなモードにおけるノードの役目をしているようです。

カネタ「つまり、珪素が、さも微生物であるかのように、動きまわるといふことか。

グリーン「そうです。まるで小さな生き物のように、最も変動の激しいのが珪素です。

ヤカタ「生物学の見地からいえば、動きまわるといふだけで、それを微生物と呼ぶのは少々難しいですね。私にいわせれば、この木の成分のひとつである珪素は、動きまわるといふより、常に変化するモジュールの中心として存在するように、セットされているといった感じかな。

カント「それじゃあ、シリコン・チップじゃありませんか。

カミヤ「で、科学者諸君、これは、木かね、それとも、いったい何だ？ 救援信号は、どこから発せられた？ この木からか？ ならば、何のために？ さあ、諸君、クイズの数はどんどん増えていくぞ。

カント「一部を採取して、本船に少し持ってかえって、もっと詳しい分析をしてみませんか。そうすれば、何か分かるかも知れません。

カネタ「賛成だな。そうしたほうがいいな。

カミヤ「そうだな。じゃあ、この木の一部と、土をビートル本船に持ちかえることにするか。

その作業に入る。

溶暗。

溶明。

ドクター・グリーンがただひとり、木の前に立っている。

カント技術部長が、来る。

カント「ドクター・グリーン。

グリーン「？・ああ、カント技術部長。

カント「何をしておいでです。

グリーン「分析結果はでたの？

カント「ええ、まあ、一通り、可能な限りの分析を試みましたが、わからないんです。

グリーン「分からないって、どういうこと？

カント「ことばどおりの意味ですよ。

グリーン「これは木なの？ そうじゃないの？

カント「ですから、木であれば木。そうでなければ、そうでない全てです。ところで、ちよ

いと僕も冗談半分に、あるデータとこの木とが、どう対応するか、数学でいう群論の構造代数と画像分析を使つてやってみたんです。すると、与えたデータと、この木は同型であることが判明しました。つまり、同じものだったんです。どんなデータを与えたと思います？これがお笑いになるかも知れませんが、旧約聖書のエデンの園に登

場する、園の中心にあつた知恵の木の神話的数据です。

グリーン「じゃあ、この木は、

カント「いや、そうとは限らないですよ。だって、別のデータを与えれば、そのデータとも同型になるんですから。

グリーン「そう。・・・

カント「ドクターが仰つたように、ひじょうに不思議です。

グリーン「ねえ、カント君、あなた、宇宙樹の話って知ってる？

カント「宇宙樹ですか。はい、アカデミーのライブラリーで、読んだことがあります。

グリーン「宇宙のすべての生命の源。そこから、生命が生まれて、宇宙のあらゆる象限に種子が蒔かれたつて話。だから、人類の祖先、その祖先の祖先をずうんと辿つていつて、アミノ酸も、地球という天体に飛来してきた宇宙樹の種子だという説よ。

カント「でも、あれは、ただのファンタジイでしょ。

グリーン「カント君、あなたが、植物というものがいったい何なのか、考えたことある？

カント「植物ですか。さあ、僕は技術畑の人間ですから。

グリーン「植物、樹木は、人類よりはるかに古い歴史を持つているわ。もう、使い果たされてしまったけど、石油や石炭に姿を変えても存在した。そのエネルギーがなかったら、人類の発展はなかったわ。

カント「そうですね。

グリーン「カネタ博士は、この惑星の土壌が出来過ぎだつていつてらしたけど、地球の植物と人間の関係だつて、出来過ぎよ。地中に没した植物はエネルギーの源となり、現存している植物は、人類に必要な適度の酸素を供給してくれる。そればかりか、香りや味や成分は、人間の精神医学のセラピーにまで関係している。いったい、植物とは何？

カント「さあ、ともかく、黙して語らぬ存在ではありますね。

グリーン「そうよ。黙して語らない。数十億年にわたって、彼らは黙して語らず、そうして生きつづけてきたのよ。人類だけじゃなく、あらゆる時代のあらゆる生命とともに。考えてみれば、こんな不思議な存在はないわ。

カント「ええ、いわれてみると、たしかにそうです。

グリーン「窓辺に置いた観葉の鉢植えでさえ、人間に対して、すごく優越した存在にみえることがあるわ。黙っていて、主張しているわけでもないのに、それでいて、はつきりと存在していて、ときどき私なんか、威圧感すらおぼえるわ。

カント「ああ、僕も、樹木や草花にそんなことを感じた覚えがあります。あれって、いったい何でしょうね。

グリーン「私たちなんて、ただの微生物かも知れないわね、この木からみれば。

カント「・・・そうかも知れませんね。

グリーン「ねえ、もし、もしよ、救援信号を発信してきたのが、この木としたら・・・カント君、あなた、どう思う？

カント「可能性からいえば、救援信号は、この木が発信したとしか考えられません。

グリーン「それは、何のためかしら。

カント「そうですねえ。

グリーン「何から、何を救援するための信号かしら。

カント「分からないですねえ。

グリーン「でも、救援信号は送られてきたのよ・・・フェーザー・ガンをして頂戴。

カント「どうするんですか？（ガンを渡す）

グリーン「ビートル・コンピュータにこの地点をセンサー・サーチさせて頂戴。救援信号が発信されるかどうか、調べるの。（ガンで木を狙う）

カント「ビートル・コンピュータ、オープン。現在座標を最大感応レベルでセンサー・サーチせよ。

グリーン「レベル3で照射するわよ。(フェーザーを撃つ) 反応はどう？

カント「ビートル、救援信号感知の有無を報告せよ。

C——「センサーに、信号はキャッチされません。

グリーン「損傷の具合はどう？

カント「木をみて」特に。レベル3くらいじゃ効果がないのかも知れませんね。

グリーン「人間なら、ショックで1時間は気絶してるのに。じゃあ、レベル最大にしてみ
ましようか。ネオ・チタンですら破壊できるレベルよ。

カント「いや、ドクター、それはあまり意味がないかも知れません。

グリーン「あら、どうして？

カント「我々の分析機器ですら、解析できなかった相手です。フェーザーから身を守るく
らいワケなくやるんじゃないでしょうか。

グリーン「じゃあ、救援信号は何故？いったい何が危機にさらされているというの？

カント「ドクターのおっしゃるとおり、この木が宇宙樹というヤツだしたら、宇宙その
ものの、何かが危機に瀕しているのかも知れませんね。

グリーン「あるいは、こういう答えはどうかしら。あの信号は救援を求めるためのものじゃ
なくて、危機に直面している者に対する警告の信号である。

カント「つまり、我々が発すべきものを、この木が感知して逆に送つてよこしたというこ
とですか。

グリーン「さあ、謎々よ。私たちは、この謎を解かないといけないみたい。

カント「難しい謎々ですね。

グリーン「ええ、謎を提出したるものは、こうして「黙して語らない」・・のだから。

ふたり、木を見て立っている。

声「（ウルトラQのあれみたいに）黙して語らない。この世界の真理とは何だろう。真理は人類に対して常に、沈黙してきた。答えを隠してきたのである。その沈黙の重い扉を開けるために、人類は歴史を重ねてきたのだといつてもいい。目前にひろがる宇宙こそは人類の前に提出された巨大な謎々のようなものかも知れない。

と、ちらほらと、枯れ葉がふってくる。

グリーン「カント技術部長、

カント「ええ、これは。

グリーン「枯れ葉だわ。常緑の針葉樹だと思ったのに。

カント「ビートル応答して下さい。船長、降りてきて下さいますか。こちら、カント技術部長です。事態が急変しました。みなさんも、お願いします。

枯れ葉のちらほら、ふる中、乗組み員が再びそろろう。

カミヤ「これは、どういう状況なんだ。

カント「わかりません。急に、こんなふうになったんです。

ヤカタ「（カネタに）どう思われます？

カネタ「（トリコーダーを見て）みたまえ、救援信号と同じ波長のパルスだ。

カント「パルスは枯れ葉から出てますね。枯れ葉のゆらぎがパルスになってるんです。

カミヤ「救援信号の正体はこれだったのか。

グリーン「枯れるのかしら、この木。

カント「みてください。（と、真上の空を指差す）枯れ葉が空に向かって、吸い上げられるように飛んでいきますよ。

みんな、枯れ葉の飛んでいく彼方を視線で追う。

カミヤ「いったい何処へ飛んでいくんだ？」

グリーン「・・・おそらく、宇宙の、あらゆる・・・ところへ。

カント「トリコーダーをみて」これは、

カミヤ「どうしたんだ。

カント「ゆらぎの通信バルスを翻訳してみたんです。

グリーン「同様に、そうしてみる」まあ、なんてこと。

カネタ「驚いたね。

カミヤ「トリコーダーを覗きこんで、翻訳文を読んでみる」次なる植樹の地へ。なんだ、これは。どういうことだ。

カネタ「読んで字のごとくだよ。この樹木は、この惑星に植樹されたものなんだ。そうして、この枯れ葉は、枯れ葉なんかじゃない。胞子、つまり種子というわけだ。

カント「そうか、もしかすると、この惑星には文明が、かつては文明が存在したのかもしれない。この木のシリコン・チップのような組成は、その文明の名残なのかも。

グリーン「その文明は、どうなったというの？」

カント「待てよ、するとあの救援信号は、この惑星の文明が発信したものを、この木がただ真似てみただけなのかも。

カネタ「文明は、こいつを植樹するために、すべて、このごとく、かくなる広大な肥沃の大地となつたというわけだな、なるほど。

カミヤ「いったい、誰がそんなことを。

グリーン「・・・まさか、いえ、きつとこの木ね。この木が、樹木自身が、そうしたのよ。自らを植樹するために、この惑星の文明を・・・」

カネタ「グリーンくんの推論が正しいとしても、この樹木にとってみれば、惑星の文明を滅ぼしたのではない。ただ、植樹に必要な肥沃なる大地をここにこしらえたのに過ぎないんだろう。

カント「あの、枯れ葉、胞子が運ばれていくのだとおっしゃいましたね。宇宙のあちこちに。すると、

カネタ「植樹か。木が、いつぽんの木が、自らの分身をさまざまな天体に植樹して繁殖しているということか。

カミヤ「この枯れ葉、いや、胞子が、地球に届かぬことを祈るのみだな。

それぞれ、枯れ葉を手にした後、虚空を見つめた。

女の声で「一本の木があつた。

1

明るくなると（といつても、夜らしいのだが）一本の木があつて、その木に男が縛られている。

それをはさんで、銃を抱えた男と女が向かい合っている。

男Ⅰ（銃を抱えた男）「肩がこりませんか。

女Ⅰ「どうということ？

男Ⅰ「息がつまらないかといつてゐるんです。

女Ⅰ「そりゃ、肩もこるし、息もつまるわよ。

男Ⅰ「きつと、何も起こりませんよ。ちよつと休みませんか。

女Ⅰ「何も起こらないとは思うけど、休むつて、どうするの？

男Ⅰ「お互い、銃を向けあうのは、やめて、座りませんか。

女Ⅰ「座つてどうするの。

男Ⅰ「だから、休むんです。休憩ですよ。寒いでしょ。ずいぶんと冷えてきましたよ。僕は火を焚きます。いけませんか。

女Ⅰ「ありがたいと思うけど、そんなに気をゆるしていいのかしら。

男Ⅰ「僕たちが敵どうしなのは、明白な事実です。それはしかたないことです。互いの国は戦争していたんですからね。

女Ⅰ「国が停戦したから、私たちも停戦しようよ、あなたはそういうのね。

男Ⅰ「ええ、そんなところですよ。考えてみれば、バカバカしいじゃありませんか。そりゃ

あ、ここはたしかに、国境の一部です。越境者が出ないように、僕たちは毎日こうやって、見張りに立っている。でも、ここは、特に重要な戦略の拠点でも何でもない。ただの便宜上の国境ですよ。

女1「そうよね。国境つたって、目印に、こんな木があるだけでもんね。

男1「だから、サボタージュしましょうよ。焚き火にあたりながら、お互いのことを話しましょう。僕はもう、気疲れしてつらいんです。それに、何度もうのように、ほんとうにバカバカしいんです。なんだ、たまたま、僕はこつちの国に生まれ、あなたは、そつちの国に生まれただけじゃありませんか。それが、昔っから仲が悪くて、何度も何度も戦争している。僕の父親のそつちの父親の代から、そんな具合です。だけど、ねえ、あなた、知ってます？ 何で戦争が始まったのか。

女1「あなたの国が攻めてきたからだって聞いたわ。

男1「僕はその逆の話を上官から聞きましたよ。

女1「先に攻めてきたのは、そつちでしょ。

男1「だから、そんなことはもう、僕にはいいんです。だって、わからないんだから。

女1「私だって、聞いたただけだから、ほんとのことは知らないけど。

男1「誰ももう、ほんとうのところは知らないんじゃないんですか。ただ、相手が殺したから、こつちも殺す。そういう理屈に従ってるだけですよ。

女1「しかたないじゃない。それが戦争なんだから。

男1「僕たちは、交代の要員が来るまで、いつもこうやって顔をあわしてますよね。

女1「ええ、たまには、違うひとにも来るけれど。

男1「僕には、もう耐えがたいですよ。口もきかずに、銃を向けあって、こうやってつっ立ってるなんて。

女1「だって、任務なんだから。

男1「ねえ、だから、僕たちだけでも束の間の和平条約といきませんか。ふもとに下りれ

ば、酒だつて買つてくれる。

女Ⅰ「そんな、任務を放棄するなんてこと、私には出来ないわ。

男Ⅰ「放棄だなんていつてやしませんよ。越境者があれば、射殺でも何でもしますつてば。ただ、ちよいと、一息つこうと、申し出てゐるんです。

女Ⅰ「焚き火にあたるくらいなら。

男Ⅰ「でしょ。

女Ⅰ「寒いからよ。

男Ⅰ「まったく、昼間は汗ばむくらいなのに、夜となると冷えますからね。

女Ⅰ「薪はあるの？

男Ⅰ「いまから、拾ってきますよ。じゃあ、いいですね。

女Ⅰ「二人だけの和平条約ね。

男Ⅰ「ええ。じゃあ、適当に薪を拾ってきますが、もし、越境者があつたら、撃ち殺してください。さつてけつこうです。（去つた）

鳥が鳴いて飛んだ。

女Ⅰ「（暗闇に目を凝らして）誰？誰かいるの？・・・（あちこちに銃をむけて、捜してみ
るが、そんな心配はない）気のせいかな・・・。

男がもどつてきた。

男Ⅰ「さあ、火を焚きましょう。

焚き火が燃え始めた。

男Ⅰ「あたりましようよ。暖かいですよ。」

女Ⅰ「(焚き火の脇に腰をおろした)」

男Ⅰ「僕はムルソ。あなたは？」

女Ⅰ「ミリーヌ。」

男Ⅰ「ミリーヌさん、家族の話でもしませんか。」

女Ⅰ「いいわよ。」

男Ⅰ「といつても、僕には両親はいないんですよ。」

女Ⅰ「死んだの？」

男Ⅰ「ええ、戦争でね。べつにめずらしいことじゃないでしょ。」

女Ⅰ「幸い私のほうは、母親がまだ生きているわ。」

男Ⅰ「父親のほうは、やつぱり。」

女Ⅰ「ええ、兵隊にとられて、戦死したわ。」

男Ⅰ「僕は、祖母とふたりきりですよ。祖父も戦死です。どうせ、僕もこの先、いずれは戦死することになるんでしょうけどね。」

女Ⅰ「戦争は、終わるかも知れないって聞いたけど、今度こそ。」

男Ⅰ「そんなこと、いつもいわれている噂ですよ。毎度、そういう噂が流れるんです。何故なら、そんな噂でもないし、希望つてものが、なくなってしまうからです。何

女Ⅰ「希望か。・・・はかない望みね。」

男Ⅰ「いいじゃありませんか。明日のことをとやかく思い悩む必要というのが、僕の国にもあなたの国にもないんですから。ともかく、戦死ではいい、お終いですよ。」

女Ⅰ「いずれ、どっちの国も滅んでしまうに決まってる。私の国では、私のように、女まです、兵士として、こんなところに出向かなければならないんだもの。もう、男がいないんだから。軍服の支給だってあるわけじゃなし。」

男Ⅰ「義勇軍じゃないんですか。」

女Ⅰ「それでも、正規の兵隊なのよ。」

男Ⅰ「僕は義勇軍の志願兵ですよ。」

女Ⅰ「あなた、戦争には辟易したようなこといつてたけど、志願兵なの？」

男Ⅰ「食いはぐれがないでしょ、軍隊は。どうせ、徴兵されるんですからね、どっちにしたらって同じなんですよ。僕の国だって、男はもうあんまり残ってやしませんよ。」

女Ⅰ「あなたも希少価値ってわけか。」

男Ⅰ「まあね。・・・（縛られている男を見て）その男は何をしたんです。どうして、そんな木なんかに縛られてるんです。」

女Ⅰ「ああ、この男ね。さあ、知らないわ。軍のほうからの命令でそうなったの。ここに縛っておくように、その見張りもついでにやるようにって命令よ。」

男Ⅰ「何かやらかしたんですかね。」

女Ⅰ「きつとスパイか何かで、みせしめに殺されるんじゃないかしら。」

男Ⅰ「すると、その男を助けると、僕の手柄ということになるのかな。（銃を握る）」

女Ⅰ「（立って、銃を構える）」

男Ⅰ「冗談ですよ。ここで、殺しあいなんかしたくありませんよ、僕は。」

女Ⅰ「やめてよね、そういう冗談は。（座った）」

と、今度は、同時に銃を構えて立った。

何か、気配がしたらしい。

男Ⅰ「（暗闇に）出てこい。誰かそこにいるな。わかってるぞ。出てこないと、滅多やたらに発砲するぞ。いいのか。」

女と少女が出てきた。

男1「何だお前ら。」

女2「見逃してくださいませんか。」

男1「見逃せだと？何を見逃せというんだ。」

女2「そちらの国へ行きたいのです。これは、私の娘です。」

男1「越境者か。越境者は、即射殺ということになってるんだがな。」

女2「見逃してください。私たちは、もともと、そちらの国のものなんです。この娘の父親も、そちらの国にいます。」

男1「それが、なんで、お前たちは我が国にいますんだ。」

女2「見逃してくださいまし。」

男1「はーん、お前たちは、捕虜か何かになったか、難民で、そっちからこっちへと逃げ出したやからだな。」

女2「見逃してください。」

男1「自分たちから逃げ出して、また元の国に帰ろうなんざ、それは勝手が過ぎるというもんだな。」

女2「(袋を出す)ここに20000シミリあります。」

男1「おいおい、買収かい。」

女2「どうか、これで、お願いします。」

男1「よし、受け取っておこう。(と、袋を受け取る)」

女2「ありがとうございます。ほら、お前もお礼をいうんだよ。」

娘「ありがとうございます。」

男1「ちょっと待ってもらおう。助けるとは、一言もいつてないぞ。」

女2「お願いいたします。」

男1「(女1に) ねえ、あなた、人を殺したことがありますか。

女1「そりゃあ、戦争だから。といたいところだけれど、まだ実際にはないわ。

男1「僕はあるんですよ。誰をとはいけません。誰だか知らないけれど、ともかく僕の鉄砲の弾にあたって死んだヤツはいるでしょう。何度も戦闘に参加しましたからね。だから平気なんですよ。

女1「何が平気なの？

男1「越境者は射殺ですからね。僕は、いまから、こいつらを殺します。しょうがないでしょう。規則なんですから。

女2「助けて下さい。お願いします。

男1「娘だといったな。母親が射殺されるところを見せるのはしのびない。そこだけは、人情ってヤツだ、おい、母親のほうだけ来るんだ。(女1に) ねえ、あんた、この娘の見張りを頼みますよ。

女2を連れて男1、暗闇に消える。

娘「(跪き、手をあわせて、女1に懇願する) 助けてください。助けてください。

女1「(唇を嚙んで、そつぽを向く)

銃声が聞こえて、男1がもどってくる。

男1「さて、ひとりすんだ。次は娘の番だ。さあ、来るんだ。

女1「ねえ、そのこだけでも助けてあげれば。

男1「あんたが、助けられそうです。ここで、僕を撃ち殺せばいいんですよ。

女1「・・・

男1「何なら、そうして下さい。僕も兵隊ならば、軍の命令は実行しなけりやならない。たとえ、子供でも越境者は射殺しなくちゃならない。

女1「まだ、国境から、出てないじゃない。

男1「じゃあ、出たところを撃ちますか。そこで、あなたが、それを阻止せんとして応戦しますか。つまりは、あなたと僕との撃ち合いだ。国境紛争というヤツかな。和平条約がとんだところで、180度転換してしまいましたね。やりますか？

女1「銃を構えるが・・・フツと息を吐くと、銃を下ろす)

男1「さあ、お嬢さん、いこうか。天国でお母さんが待つてるよ。

男1、娘を連れていった。

やがて、銃声がする。

男1が母親の死体をひきづって、もどってきた。

男1「ちよつと国境を超えますよ。こいつをそっちに移すんです。つまりは、越境したという、事実をつくっておかないとね。

母親の死体を女1の国のほうへ運び去ると、次は娘の死体も同じように、女1の国境を越えて、運び去った。

男1「これで、完了ですよ。越境者二名射殺です。さて、僕は、この2000シミリで酒でも買ってきますよ。呑まないことには、やってられませんよ。(去った)

突然、縛られていた男が口をきいた。

男2「無力だったな、あんた。

女1「縛られている男に向いた）うるさい。貴様などに、そんなことをいわれる筋合いはない。

男2「どうだ、罪滅ぼしに私を助けないか。

女1「なんだと。

男2「一万シミリやつてもいいぞ。

女1「お前、何をやったんだ。

男2「私はただ、祖国で平和運動の指導をしていただけだ。

女1「平和運動だと？

男2「そうだ。それが、スパイの嫌疑を着せられて、捕まったのだ。

女1「いい加減なことをいうんじゃないよ。

と、暗闇から、さつきの母子が顔を出した。生きていたのだ。

女1「（驚く）お前たちは、いったい、どうしたんだ。

女2「さつきの方が、お前たち二人は、自分に殺されたことにして、逃げろと仰ってくださいましたのです。

女1「殺されたことって、じゃあ、さつきのあれは、

女2「はい、越境者を敵国領土にて射殺したことにするからと。

女1「狂言だったわけ？

女2「ええ、こうやって2000シミリもお返しくださいました。

女1「そうだったのか。

女2「ですが、娘がどうしてもお礼を述べたいといえますものですから。

娘「あの方は、どこにいらっしゃるの。

女1「ふもとまで、酒を買いにいくと、ここを下りたよ。

女2「さようですか、では、おもどりになられましたら、きつと、お礼をお願いいたします。

女1「ああ、わかった。だから、さつさとお行き。

女2「はい、それじゃあ、（娘に）行くよ。

母子は去った。

溶暗。

2

明るくなって、次の日の朝。

男2の縛られている木のそばに、女1だけが、銃を構えて立っている。

男1の国のほうから女3が、やはり、銃を手にしてやってくる。

女3「ミリーヌっていうのは、あんたかい。

女1「そうだが、何か。

女3「ムルソの知り合いだそうだね。

女1「知り合いといつても、敵どうしで、ここで、国境の見張りをしていただけだ。

女3「かたいことはいいんだ。まあ、私もあんたの敵ということになるから、事務的に伝えるだけのことは伝えておくよ。ムルソはね、昨夜、地雷を踏んで死んだよ。死ぬまぎわに、伝言を頼まれたんだ。ミリーヌによろしくとね。

女1「・・・わかった。その伝言、しかと聞いた・・・ありがとう。

女3「さあ、もう口は聞かないよ。敵どうしだからね。

女1「（男2の傍に行くと、銃を向けた）お前、平和運動の指導者だといったね。

男2「そのとおりだ。

女1「それに嘘はないだろうね。

男2「ほんとうだ。逃がしてくれる気になったのか。五万シミリくらいなら用意できるぞ。
女1「(男2を撃つ)

溶暗して。

